

書 評

小林隆児 (著)

「関係の病としてのおとなの発達障碍」

2018年 A5判 217頁 弘文堂 3,200円+税
ISBN 978-4-335-65178-6

昨今、耳目にふれることの多くなった「おとなの発達障碍」について、本書は「関係」の観点から読み解いていく。

著者、精神科医である小林隆児氏は、自閉症スペクトラムをはじめ、あらゆる精神医学的な症状の背景には「甘え」のアンビヴァレンスという心性、関係の病理があるとする。非常にあいまいな「おとなの発達障碍」と言われているものをどう捉えたらよいのか。あらゆる症状の背景にあるアンビヴァレンスに立ち返ることによって読み解いていく。

母子ユニットでの、自閉症スペクトラムの、乳幼児期における母子関係の観察を通じて、一見すると「一人遊びをしている」といったふるまいの中に、子が母を求めようとする動きをとりながら、いざ母が応じようとするとき背を向けるといった動きを観て取った。そこに、母子の間に立ちあがる「甘えたくても甘えられない」と表現できるような心性、アンビヴァレンスを感じ取った。この心性が、加齢、発達とともにどのように変容していくのか、症状といわれる状態へと移行していくのかを描く。ある特徴なり症状なりを、個の中に見るか、他者との関係の中で生じた動きとしてみるか。「関係をみる」と「個をみる」ことの違いがここにある。

よって、治療のためには、治療者との間に立ちあがるアンビヴァレンスを捉え、適時に気づ

きを促すことが肝要であると説く。アンビヴァレンスを捉えられるようになるには、治療者自身の感性を働かせることが必要となり、その感性を磨くための「感性教育」までもが示される。症状論、治療論、そして治療者に対する教育論は、その一つひとつが多量の事例によって根拠づけられ、説得力をもつ。

アンビヴァレンスを捉えること、そのために感性を磨くこと、ともに鍵となるのが「関係をみる」ことである。臨床家には、「乳幼児期に観察された関係病理としてのアンビヴァレンス」というところの動きとしてのゲシュタルトをしっかりと感知すること」が求められる。そして、その「ゲシュタルトを感知するためには、原初的知覚である力動感とはどのような性質のものかを自らの身体を通して理解できるようになること」が求められる。私たちのコミュニケーションは、理性/verbalの次元と感性/vocalの次元の層とが重なり合って成り立っている。力動感を体感するには、感性/vocalの、普段意識しない次元の世界で起こっていることに触れられるようにならなければならない。この層に触れられるようになるには「個をみる」のではなく「関係をみる」ことができなければならないという。

普段考えている「関係」を想定していると、著者のいう「関係」に戸惑う。

私たちは「よい」関係、「わるい」関係などと言ったりする。あるいは、臨床心理学の、特に精神分析においては、転移・逆転移という、関係にまつわる概念がある。クライアント - セラピスト間に生じる関係性を、幼少期からの重要な他者との関係のあり様が反映されるものとして捉える。私たちは「関係」を考えるとときに、ある程度持続した、まとまりある状態を想定し、対象化していることに気づく。そうでなければイメージもできないし、言葉にもできないわけであるから当然といえば当然である。しかし、そのような、いわば「静的」な「関係」を想定して、著者の「関係」を捉えようとする読み損なう。

本書に記載されている事例に次のような場面がある。自分は発達障害ではないかと訴える40歳代の女性との数回目の面接場面である。困り事として、「思ってもいないようなことがつい口から出てしまう」、「それが怖いから極力何も言わないようにしている」、「自分のことについて何か言われると、つい相手の悪いことだけを言うてしまう。オブラートに包むように言うことができない」などと訴える。著者の、治療者としてのコメントが添えられている。「彼女の発言や態度に触れて、何も言えないと言いつつ、何か言いたげで、どこか不満気を感じられ」、彼女の訴えの背景に「拗ねた態度」、「あまのじゃくな態度」を感じ取った、とある。

面接の、二者の間に漂う、どこかぎこちない、不自由な空気を感じ取る。それがいったい何か

らきているのか、内省し、「何か言いたげな」、「不満気な」あり様を捉える。この、二者の間に漂う空気、感触こそが「関係」の姿かたちである。

私たちの心のなかでは、他者と交わった刹那に何かしらの動きが生じているが、いちいちそのすべてが意識されるわけではない。意識されたものだけがあるまとまりをもち、補整され、言葉で形容できるような「関係」認識へと発展する。著者は、普段意識しない次元で、二者の間に、瞬間的に、発生・消滅を繰り返している心の動きの織りあいこそが、「関係」の、コミュニケーションの基盤であると説く。「なめらか」、「ぎこちない」、「はりつめた」といった、感触、雰囲気、空気の感じとして感じられるような類のものである。

本書を読むには、一旦、自分の内にある「関係」概念をまっさらにして、文章の流れに素直に身を委ねる必要がある。「関係」とは何かを、改めて考えざるを得なくなる。答えは本書の中にある。

「発達」とは何か。「症状」とは、「治療」とは、「関係」とは何か。「おとなの発達障害」を切り口にしながら、きわめて根源的なテーマとその洞察が展開されていく。平易な言葉と具体的な事例とによって、最初はすっとした読み心地のした本書だが、読めば読むほどに深さ、重み、読み応えがにじみ出てくる。

(東洋大学朝霞キャンパス学生相談室：

佐川眞太郎)